

(株)日本政策投資銀行

<https://www.dbj.jp/>

1. 財政投融资を活用している事業の主な内容

出資と融資を一体的に行う手法その他高度な金融上の手法を用いた業務を営むことにより日本政策投資銀行の長期の事業資金に係る投融资機能の根幹を維持し、もって長期の事業資金を必要とする者に対する資金供給の円滑化及び金融機能の高度化に寄与すること。

2. 当該事業に関する政策コスト分析の試算値

① 政策コスト

(単位:億円)

区分	7年度	8年度	増減	主な増減要因
1.国の支出(補助金等)	0	0	△0	
2.国の収入(国庫納付等) ※	△19,022	△24,632	△5,610	・前提金利の上昇による資金運用収益の増加による国庫納付の増加(△5,484億円)
3.出資金等の機会費用分	9,409	14,211	+4,803	・前提金利の上昇による出資金の機会費用の増加(+2,415億円)
1～3 合計＝政策コスト(A)	△9,613	△10,420	△807	
分析期間(年)	38年	37年	△1年	・年度の進行によって分析期間が短縮。

投入時点別政策コスト内訳

(単位:億円)

(A) 8年度政策コスト【再掲】	△10,420
① 分析期首までに投入された出資金等の機会費用分	12,773
② 分析期間中に新たに見込まれる政策コスト	△23,194
国の支出(補助金等)	0
国の収入(国庫納付等) ※	△24,632
剰余金等の機会費用	1,438
出資金等の機会費用	-

発生要因別政策コスト内訳

(単位:億円)

(A) 8年度政策コスト【再掲】	△10,420
① 繰上償還	2,727
② 貸倒	1,183
③ その他(利ざや等)	△14,330

② 経年比較分析(対前年度実質増減の算出)

(単位:億円)

実質増減	主な増減要因
△7,661	・6年度実績確定及び7年度見込改定等による国庫納付金増によるコスト減(△6,239億円) ・繰上償還増加に伴うコスト増(△411億円)

③ 感応度分析(前提条件を変化させた場合)

(単位:億円)

(A) 8年度政策コスト【再掲】	前提金利+1%ケース	増減額	増減理由
△10,420	312	+10,732	・前提金利の変化による機会費用の増(+8,784億円)
(A) 8年度政策コスト【再掲】	貸倒償却額+1%ケース	増減額	増減理由
△10,420	△10,407	+13	・貸倒償却の増加に伴う国庫納付の減(+10億円)と機会費用の増(+3億円)

(注) 各欄は単位未満四捨五入の端数処理により、合計において合致しない場合がある。

※ 国の収入(国庫納付等)は、収入がある場合マイナス計上する。例: △100億円…100億円の国庫納付等を表す。

3. 分析における試算の概要及び将来の事業見通し等の考え方

【試算の概要】

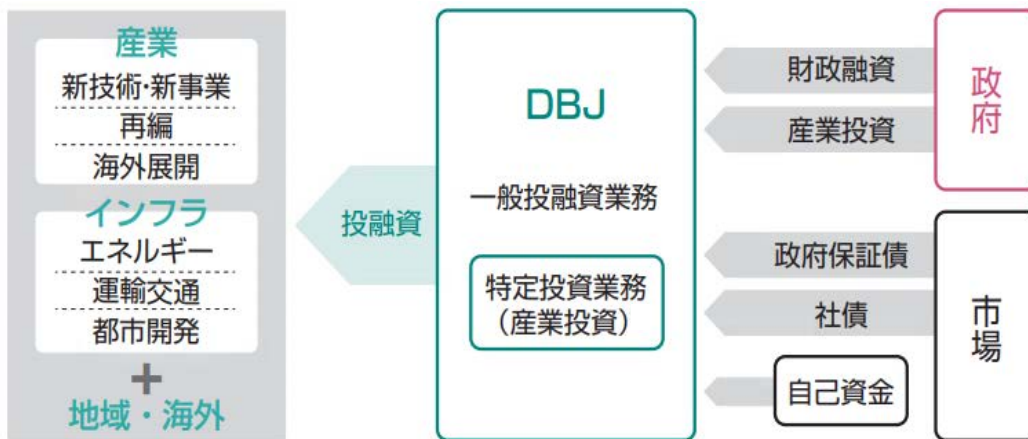
- ①すべての投融資事業を試算の対象としている。
- ②既存の資産残高(令和7年度末時点)に加え、令和8年度投融資計画(2兆5,400億円)に基づき投融資を実行した場合について試算している。
- ③分析期間は、財投資金返済完了までの37年間となっている。
- ④資本金及び準備金については、平成27年5月の株式会社日本政策投資銀行法一部改正等により、政府保有株式の売却時期が明示されなくなった(「平成27年4月1日から起算しておおむね5年後から7年後を目処として」→「できる限り早期に」に改められた)ため、分析最終年度に政府保有株式の全額を処分することと仮定している。
- ⑤国庫納付の金額及び法定準備金の積立額については、税引前利益から法人税相当額を国に納付することと仮定している。
- また、配当金については、分析最終年度までの間、税引後利益の25%を国に納付することと仮定している。
- ⑥平成20年10月の民営化により企業会計基準での決算となったことを受け、従前の特殊法人会計での試算との連続性の可及的維持のため、引当金残高を資本の部へ戻入する等の調整を行っている。

【将来の事業見通しの考え方】

- ①繰上償還率は、過去の実績を用いて推計している。また繰上償還補償金収入は、業況が極度に悪化している先を除いて全額徴求する前提で試算している。
- ②貸付金償却は、資産査定による分類をベースに、正常債権については本行の過去のデフォルトデータを用いて計算し、要管理先以下の債権については担保等も含め個別に回収可能性を判断している。銀行法に基づく令和7年3月末のリスク管理債権残高は1,156億円(単体)である。また、貸倒引当金は令和7年3月末時点で1,165億円(単体、企業会計基準)である。

	(実績)					(見込み)	(計画)	(試算前提)
年 度	2	3	4	5	6	7	8	9～
繰上償還率	2.86%	3.44%	1.72%	2.29%	2.98%	0.34%	0.34%	9年度以降累計:6.43%
貸倒償却率	0.01%	0.00%	0.12%	0.12%	0.01%	0.14%	0.13%	9年度以降累計:0.78%

4. 事業スキーム(図示)



5. 当該事業の成果、社会・経済的便益など

①投融資額実績(統合報告書より):

	融資額	投資額
・令和3年3月期	5兆4,842億円	3,025億円
・令和4年3月期	2兆9,946億円	2,279億円
・令和5年3月期	3兆8,303億円	1,915億円
・令和6年3月期	3兆4,550億円	3,649億円
・令和7年3月期	3兆6,929億円	3,824億円

②平成20年10月まで(旧日本政策投資銀行)は、以下の点に重点をおいて長期・固定の融資等を実施。

- ・地域再生支援 中心市街地活性化等地域の街づくりの推進、地域の社会資本整備の促進、産業立地の促進、地域における雇用の創出につながる事業の推進等
- ・環境対策・生活基盤 循環型社会形成推進、環境配慮型企業活動支援、防災対策、人にやさしい建築物整備等の福祉・高齢化対策、交通・物流・情報通信ネットワークの整備等
- ・技術・経済活力創造 規制緩和分野の投資促進、企業の事業再構築・事業再生支援、輸入・対内投資促進、新技術開発、ベンチャー・産学連携支援等

③平成20年10月以降は、以下の点に重点をおき業務を遂行。

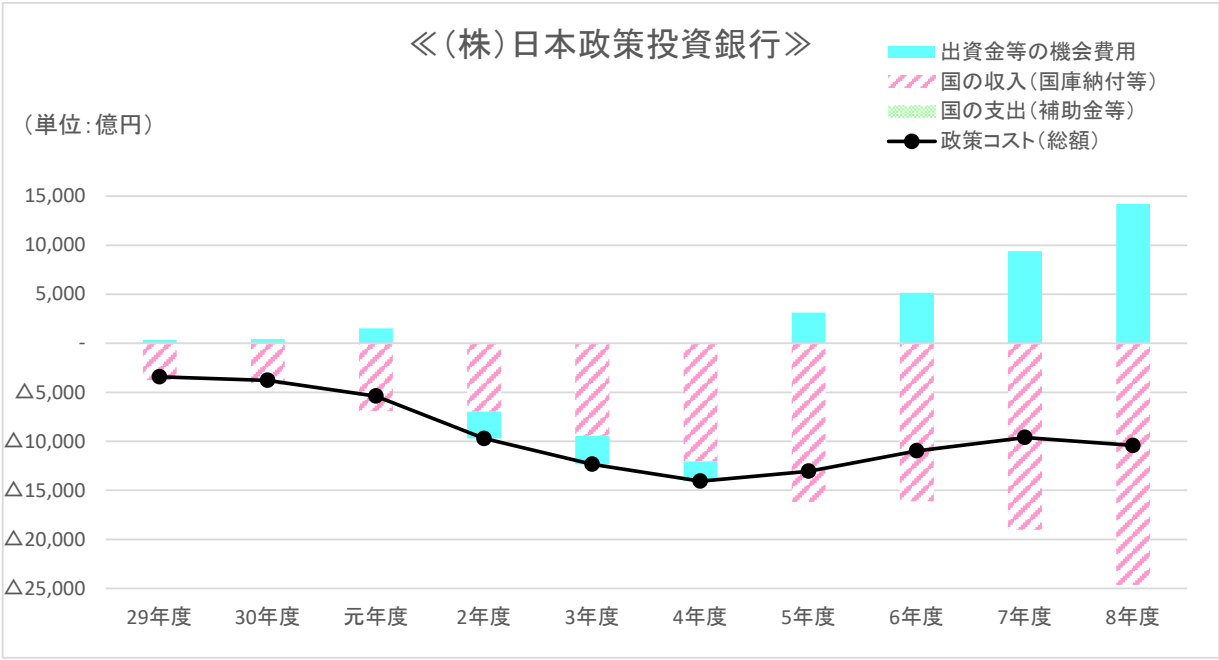
- ・完全民営化の実現に向けて、日本政策投資銀行が培ってきた顧客基盤を維持・深耕し、得意とする分野を重点的に取り組み、収益力とともに企業価値の向上を図るとともに、危機対応業務等にかかる指定金融機関として、これまで政策金融機関として培ってきた経営資源等を有効活用し、業務を適切に遂行する。
- ・これまで政策金融機関として培ってきた中立性、信頼性、公平性等を活かし、事業活動や地域経済において高度化・多様化する金融サービスへのニーズに幅広く応えられる民間金融機関となることを念頭に、現在までに培われた審査や産業調査のノウハウを活用し、創造的金融活動による課題解決で顧客の信頼を築き、豊かな未来を、ともに実現していくことを目指す。

(参考)財投機関の財務状況については、以下のURLより御覧いただけます。

<https://www.bb.mof.go.jp/server/2026/dlpdf/DL202614001.pdf#page=813>

政策コスト分析結果の概要

【政策コストの推移】



(注) 各年度の政策コストについて、推計に適用される金利等の前提条件は異なる。

(単位:億円)

年度	29年度	30年度	元年度	2年度	3年度	4年度	5年度	6年度	7年度	8年度
政策コスト(総額)	△3,421	△3,785	△5,394	△9,712	△12,336	△14,065	△13,058	△10,975	△9,613	△10,420
国の支出(補助金等)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
国の収入(国庫納付等)	△3,760	△4,208	△6,923	△6,978	△9,436	△12,041	△16,185	△16,129	△19,022	△24,632
出資金等の機会費用	339	423	1,529	△2,734	△2,900	△2,024	3,127	5,154	9,409	14,211

【政策コストの推移の解説】

- 平成29年度以降は、マイナス金利の影響により、出資金の機会費用が大幅に減少している。
- 令和元年度は、財投資金返済期間長期化に伴う分析期間長期化により、各コストの絶対値が大きくなっている。
- 令和2年度は、前提金利低下に伴う割引率上昇等により、出資金の機会費用が大幅に減少している。
- 令和3年度は、特定投資業務に係る前提条件(収益率)の見直し等により、国の収入が増加(政策コストは減少)している。
- 令和4年度は、前提金利の変更等に伴い、国の収入が増加(政策コストは減少)している。
- 令和5年度は、前提金利変更に伴う割引率低下等により、出資金の機会費用が大幅に増加している。
- 令和6年度は、分析期首の準備金増等により、出資金の機会費用が増加している。
- 令和7年度は、前提金利変更に伴う割引率低下等により、出資金の機会費用が増加している。
- 令和8年度は、進行年度の国庫納付額見直し等により、国の収入が増加している。

【政策コスト分析結果(令和8年度)に対する財投機関の自己評価】

- 分析期間が長期にわたるため、政策コストの金額が前提金利変動の影響を受けやすくなっているが、実態としては継続的に割引率を超過する収益確保を見込んでおり、政策コストは安定的に負の値となっている。
- 感応度分析の結果、前提金利+1%ケース、貸倒償却額+1%ケースにおける政策コストはそれぞれ10,732億円、13億円増加する。分析期間が長期に亘るため累積の影響額が大きくなるものの、各年度毎の影響は軽微であり、現実の財務への影響は特段問題ないとする。